様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：３４３１２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2023
課題番号：１７Ｋ０４３８４

研究課題名（和文）大学生におけるラーニングアウトカムの発達軌跡を規定する要因

研究課題名（英文）Factors Regulating the Developmental Trajectory of Learning Outcomes in University Students

研究代表者
尾崎　仁美（OZAKI, Hitomi）

京都ノートルダム女子大学・現代人間学部・教授

研究者番号：１０３１４３４５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、大学生におけるラーニングアウトカムの獲得プロセスを解明することであった。入学時から3年間の縦断調査を実施した結果、ラーニングアウトカムの関連要因には学年差があること、授業だけでなく社会的活動等の正課外活動も多様な力の獲得につながることが示された。学業への取り組みが消極的な者は、積極的な者と比べると様々な力の獲得が低いと認識されていたが、3年間の変化を検討すると、他者と協働する力や、意見を相手に伝える力等において、学年による向上が認められた。本研究により、一時点での評価や個人差のみでなく、学年進行に伴う変化や個人の成長にも着目してラーニングアウトカムを捉える必要性が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近年、大学生のラーニングアウトカムの評価やラーニングアウトカムに関連する要因について研究が蓄積されつつあるが、ラーニングアウトカムに影響する学年特有の要因や心理的課題についてはあまり研究が行われていない現状がある。本研究では、正課教育および正課外活動のどのような要因が大学生のラーニングアウトカムの獲得を促進させるのかという点について、学年や時期におけるラーニングアウトカムへの関連要因や、学業への取り組み方によるラーニングアウトカムの差異を明らかにしたことにより、大学における授業や学生支援の在り方に貢献することが期待される。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to elucidate the process of acquiring learning outcomes among university students. We conducted a longitudinal survey over three years, starting from the first year of university admission. The results indicated that the factors related to learning outcomes vary by academic year and that formal classes and extracurricular activities contribute to the acquisition of diverse skills. Furthermore, students who showed a passive approach to their studies were perceived to acquire fewer skills than their more proactive counterparts. However, when examining changes in learning outcomes over the three years, improvements in abilities such as collaborating with others and effectively conveying opinions were observed as students advanced through academic years. This study underscores the necessity of considering evaluations at single points, individual differences, changes over time, and individual growth when assessing university students' learning outcomes.

研究分野：教育心理学

キーワード：大学生　ラーニングアウトカム　学習成果　縦断調査　学業への取り組み　大学教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９，Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

少子化や大学進学率の上昇，グローバル化など，大学を取り巻く環境が大きく変化する中で，大学教育の質保証や大学教育の成果が注目されるようになって久しい。近年，専門的な学習成果の他，学士力，社会人基礎力等，様々なアウトカムを規定する要因が検討され，研究が蓄積されつつあるが，課題も多々残されている。

1 点目は，縦断的データの少なさである。大学生の成長や学習成果（ラーニングアウトカム）の獲得過程には個人差があるが，その個人差の規定要因を明らかにすることは大学教育の質保証の点からも重要だと考えられる。しかし，これまでの多くの研究が一時点での横断的データでのみ分析が進められ，縦断的な調査が行われたものはほとんどみられない。2 点目は，学年移行に伴う心理的課題を踏まえてラーニングアウトカムの関連要因を検討した研究がほとんど行われていないことである。大学生のラーニングアウトカム獲得の背景には学年共通の要因に加え，学年独自の要因があることが明らかにされている（松島・尾崎,2014；尾崎・松島，2014）ことから，本研究においても学年特有の要因や心理的課題に関する視点を重視した。

また，大学教育の質保証という文脈の中で，大学教育が学生の成長に及ぼす影響が議論されることが多い一方で，大学の正課授業のみならず，サークル活動，アルバイト，友だちづきあいといった正課外活動も学生の成長に影響することが指摘されている（溝上，2009；山田・森，2010）。松島・尾崎（2013）では，４年次生を対象とした大学生活で獲得した力に関する調査研究において，専門知識よりも，人間関係を構築する力や自立的な姿勢に関する力が多く抽出され，また，学生にとってこれらの力は，授業外，大学外で養成されているという認識が高いことを明らかにした。さらに Matsushima & Ozaki（2010）においても，大学生の学習意欲や学業の適応に影響を及ぼすのは，必ずしも学業に関する活動だけではなく，授業における他者と関係性等，学業以外の要因も影響していることを示唆している。これらの研究から，大学生のラーニングアウトカムには，大学での学び方，大学生活の過ごし方双方の要因をその規定要因と想定して検討することが必要ではないかという問題意識に至った。

２．研究の目的

本研究の目的は，大学入学時から 3 年間の縦断調査を行うことにより，大学生活におけるどの様な学び方，過ごし方が，学生の成長やラーニングアウトカムに影響するのか，そのプロセスについて検討することであった。

3 年間の縦断データをもとに，学年や時期によってラーニングアウトカムの関連要因にどのような違いがみられるかを検討するとともに，学年進行に伴うラーニングアウトカムの変化に着目し，学業への取り組みの学年による変化パターンとラーニングアウトカムとの関連について検討した。さらに，授業や学業への取り組み方によるラーニングアウトカムの関連要因の違いについても検討した。これら一連の研究を通して，ラーニングアウトカムの背景にある学びや大学生活について考察し，大学生の理解および大学教育への実践的示唆を得ることを目的とした。

３．研究の方法

（１）学年によるラーニングアウトカムの関連要因の検討

教育および心理系の学科に所属する女子大学生を対象として，大学 1～3 年までの前期末（7 月）と後期末（1～3 月）の計 6 回にわたる縦断調査を行った。2017 年度から 2019 年度前期までは，対面授業において質問紙調査を実施したが，2019 年度後期末の調査では，新型コロナウイルス感染症の影響により集団調査が実施できず，一部オンライン調査を実施した。調査内容は，１）大学生活における重視活動，２）授業経験，３）授業への取り組み，４）友達との学習行動，５）ラーニングアウトカムであった。

（２）学業への取り組みの個人差を考慮したラーニングアウトカムの関連要因の検討

授業の捉え方によるラーニングアウトカムの関連要因について検討するため，近畿圏内の大学生を対象に，質問紙調査を実施した。調査内容は，１）大学生活における重視活動，２）大学授業観，３）授業への取り組み，４）ラーニングアウトカムであった。

また，学業への取り組みによるラーニングアウトカムの関連要因について検討するため，近畿圏内の女子大学生を対象に，オンライン調査を実施した。調査内容は，１）学業への積極的関与，２）自己調整学習方略，３）オンライン授業・対面授業におけるつまずきへの対処，４）オンライン授業・対面授業への評価，５）ラーニングアウトカムである。

４．研究成果

（１）学年によるラーニングアウトカムの関連要因の検討

大学１年から 3 年の前期・後期それぞれにおいて，ラーニングアウトカムに関連する要因を検討した結果，学年や時期によってラーニングアウトカムへの影響要因に差異の見られることが明らかとなった。具体的には，1 年次前期では，友達と協力しあいながら学習することや，授業

時のディスカッション及び自主的学習に積極的に取り組むことが社会的関係形成力や問題解決力，自己主張力等，様々なアウトカムの獲得につながること，1 年次後期では，少人数ゼミや大学での学び方等の授業の履修や，授業での課題やディスカッションに積極的に取り組むことが，問題解決力，自律性，自己主張力の獲得に関連することが示された。2 年次前期では，社会的活動への取り組みが情報リテラシーや自律性の獲得に関連し，ディスカッションや発展的学習への積極的な取り組みが問題解決力の獲得につながること，2 年次後期では，趣味やアルバイト，授業外での学びや授業をより発展させた学びへの取り組みが自律性や情報リテラシーの獲得につながることが明らかになった。3 年次前期では，企業等と連携した実践的な授業や自分の将来のキャリアに役立つことが学べるような実用的な授業の履修がラーニングアウトカムにつながること，3 年次後期では，卒業論文や就職活動に積極的に取り組むことや，ゼミや演習の履修が多様なラーニングアウトカムの獲得につながることが示された。

また，3 年間の縦断データを元に，学年進行に伴うラーニングアウトカムの変化を検討した結果，3 年間を通して授業や学業に積極的に取り組んでいる群は，他の群と比較して，批判的思考力や持続的学習力など，多様な力を獲得したと認識していることが示された。学業に消極的な群は，学業に積極的な群と比較するとさまざまな力の獲得が低いと認識されていたが，ラーニングアウトカムの変化を検討すると，他者と協働し関係を築く力や，意見を相手に伝える力等において，学年による向上が認められた。

（2）学業への取り組みの個人差を考慮したラーニングアウトカムの関連要因の検討

大学での授業の捉え方や取り組み方とラーニングアウトカムとの関連を検討した結果，授業に対して将来へのつながりや他者との出会い等の積極的意義を見出している者や授業内外で自律的に学習に取り組んでいる者は，授業を通して多様な力を身に着けていることが示された。さらに，授業の捉え方によってラーニングアウトカムに影響を及ぼす授業の取り組み方に差異があることも示唆され，授業に様々な積極的意義を見出している学生は，自律的な学びによってラーニングアウトカムを獲得する傾向にあること，授業を義務・退屈なものと捉える学生は，ディスカッション中心の能動的授業や授業外学習の取り組みがラーニングアウトカムの獲得につながることが示された。

また，授業の要因としてオンライン授業と対面授業という授業方法の違いに着目し，また学習者の要因として学業への積極性を取り上げ，ラーニングアウトカムとの関連要因について検討を行った結果，対面授業ではオンライン授業と比べて「社会的関係形成力」の獲得が促進されること，一方，オンライン授業では対面授業よりも「情報リテラシー」の獲得が促進されることが示された。また，オンライン授業では，自己調整学習方略はラーニングアウトカムとの関連がみられなかったが，対面授業に関しては，学業への積極性が高い者においてのみ自己調整学習方略の使用が対面授業におけるラーニングアウトカムの獲得と関連するのに対し，学業への積極性が低い者においては，自己調整学習方略とラーニングアウトカムとの間に有意な関連がみられなかった。つまずきへの対処方略として，対面授業において教員に質問することは，学業への積極性の高低に関わらず，ラーニングアウトカムと正の関連を示すことが明らかになった。これらの結果から，特に学業への積極性が低い者に対する教員との関わりの重要性が示唆された。

以上の研究結果から，大学生活における学年や時期によるラーニングアウトカムへの関連要因には差異がみられること，授業だけでなく，正課外活動もラーニングアウトカムに影響することが明らかとなった。また，授業や学業への取り組み方によってラーニングアウトカムの関連要因に差異があることも示された。さらに，ラーニングアウトカムの学年進行に伴う変化を検討したことにより，大学生のラーニングアウトカムを捉える際には，一時点での評価や全体の中での位置づけのみでなく，学年の進行に伴う変化や個人の成長にも目を向ける必要性が示された。

今回は縦断調査を実施したため，限られた学部・学科の学生を対象としたが，今後は他の専門分野の学生も含めて，より多数の大学生を対象に調査を行うことが必要である。また，学生の個人特性のみならず，大学生活サイクルに即した学生の心理的課題も考慮したかかわり方や対応の仕方についても，今後さらに検討していく必要があると考えられる。

（引用文献）

Matsushima, R. & Ozaki, H. (2010). Factors Influencing the University Students' Motivation for Learning: A Cross-sectional and Longitudinal Analysis of First year to Third year Japanese University Students. Poster presented at the 27th International Congress of Applied Psychology.

松島るみ・尾崎仁美 (2013). 大学生活で身につけた力とその要因について 日本心理学会第 77 回大会発表論文集，1077.

松島るみ・尾崎仁美 (2014). 大学生活で身につけた力とその要因について（1）－学年と重視活 動による差異－ 日本教育心理学会第 56 回大会発表論文集，210.

溝上慎一 (2009).「大学生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討－正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す－ 京都大学高等教育研究，*15*，107-118.

尾崎仁美，松島るみ (2014). 大学生活で身につけた力とその要因について（2） 日本教育心理学会第 56 回大会発表論文集,211.

山田剛史・森朋子　(2010)．　学生の視点から捉えた汎用的技能獲得における正課・正課外の役割　日本教育工学会論文誌，*34*，13-21.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 尾崎仁美・松島るみ	４．巻 54
２．論文標題 大学生における学業への取り組みとラーニングアウトカムとの関連－3年間の縦断調査から－	５．発行年 2024年
３．雑誌名 京都ノートルダム女子大学研究紀要	６．最初と最後の頁 69-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 尾崎仁美・松島るみ	４．巻 22
２．論文標題 大学生のオンライン授業と対面授業における学習成果―学業への積極的関与による比較―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 京都ノートルダム女子大学研究紀要プシュケー	６．最初と最後の頁 13-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 尾崎仁美・松島るみ	４．巻 21
２．論文標題 大学生のラーニングアウトカムに関連する要因 ―大学３年生の調査結果から―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 京都ノートルダム女子大学研究紀要プシュケー	６．最初と最後の頁 27-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 尾崎仁美・松島るみ	４．巻 51
２．論文標題 大学生のラーニングアウトカムに関連する要因の検討ー大学2年生の調査結果からー	５．発行年 2021年
３．雑誌名 京都ノートルダム女子大学研究紀要	６．最初と最後の頁 55-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 尾崎仁美・松島るみ	４．巻 19
２．論文標題 大学生におけるラーニングアウトカムの関連要因－大学１年次前期・後期のデータから－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 京都ノートルダム女子大学現代人間学部心理学科・心理学研究科 研究紀要プシュケー	６．最初と最後の頁 43-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 尾崎仁美・松島るみ
２．発表標題 大学生のラーニングアウトカムに関連する要因の検討（１）ー大学2年次前期の結果からー
３．学会等名 日本心理学会第84回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 松島るみ・尾崎仁美
２．発表標題 大学生のラーニングアウトカムに関連する要因の検討（２）ー大学2年次後期の結果からー
３．学会等名 日本心理学会第84回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 尾崎仁美・松島るみ
２．発表標題 大学生におけるラーニングアウトカムの関連要因（１）－大学1年次前期のデータからー
３．学会等名 日本心理学会第83回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 松島るみ・尾崎仁美
２．発表標題 大学生におけるラーニングアウトカムの関連要因（２）－大学1年次後期のデータからー
３．学会等名 日本心理学会第83回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Rumi Matsushima,Hitomi Ozaki
２．発表標題 Factors Regulating Learning Outcomes in Japanese University Students
３．学会等名 The 26th International Conference on Atomic Physics（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 尾崎仁美・松島るみ
２．発表標題 大学生における授業への取り組みとラーニングアウトカムとの関連（１）
３．学会等名 日本教育心理学会第60回総会
４．発表年 2018年

１．発表者名 松島るみ・尾崎仁美
２．発表標題 大学生における授業への取り組みとラーニングアウトカムとの関連（２）
３．学会等名 日本教育心理学会第60回総会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	松島　るみ (MATSUSHIMA Rumi) (40351291)	京都ノートルダム女子大学・現代人間学部・教授 (34312)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関